

氏名	佐藤 愛
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7615 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ウジェーヌ・ミンコフスキー研究 一分裂性と同調性

主査	筑波大学 教授	博士（哲学）	廣瀬浩司
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	濱田真
副査	筑波大学 准教授	Ph.D. (レトリック)	対馬美千子
副査	東京電機大学工学部	教授	本郷均

#### 論文の要旨

本論文は、フランスの精神病理学者であり哲学者であるウジェーヌ・ミンコフスキー（Eugène Minkowski, 1885-1972）の思想を、哲学と精神病理学を統合するような視点で捉えることによって、その現代的意義を剔抉しようとするものである。

本論文の研究対象：ミンコフスキーは、ルートヴィヒ・ビンスワンガー（Ludwig Binswanger, 1881-1966）らとともに、20 世紀前半に起こった「人間学的精神病理学（anthropologique psychopathologie）」に大きく寄与したひとりとして知られており、また、ベルクソン哲学やフッサール現象学を、いち早くフランスで精神医学に取り入れたことでも有名である。ミンコフスキーは、1927 年の『精神分裂病』において、「精神分裂病」の患者が「現実との生きられる接触の喪失」状態にあると述べ、人間と世界との関係性の「喪失」から「精神分裂病」を規定しようとした。1933 年には『生きられる時間』を出版し、計測可能な時間に対する質的な時間としての「生きられる時間」という観点から、精神の病理において患者が経験している時間構造の変容を主張した。また、計測可能な空間に対する質的な空間としての「生きられる空間」について論じ、患者においては空間構造もまた時間構造と同様に変容するとした。1936 年には『コスモロジーに向けて』を刊行し、精神病理学的な視点のみならず、日常の生活において経験される、人間と世界の根源的構造について考察した。本論は、主にこの三つの著作を対象として取り上げる。

本論文の目的：本論文は、ミンコフスキーが、「精神分裂病（現・統合失調症）」の治癒の可能性について、人間と世界の根源的構造の分析から示そうとしたという点を強調することを独自の出発点としている。そして、こうしたミンコフスキーの思想を、とりわけ「分裂性（schizoïdie）」と「同調性（syntonie）」という二つの原理から検討し、分裂性に対して同調性を並置することの哲学的・精神病理学的意義、さらには治療的・社会的意義を見きわめることを企てているのである。すなわち、ミンコフスキーの著作の分析において最も大きな課題となるのは、「精神分裂病」が治癒可能であるとする彼の主張を、どう解釈するかという点である。この主張は、『精神分裂病』の第五章「精神分裂病概念の治療的な射程」において、明確に述べられている。「〔精神分裂病の基本障

害である] 現実との生きられる接触の喪失という概念は、この接触の全て、あるいは少なくともその一部分の回復の可能性を含む概念である。」この点に関し本論文が提起している問いは、「概念 (notion)」についての、ミンコフスキーの次のような見解である。「精神医学においては、治癒可能性という概念は、それ自体、治癒的価値を持つ。」果たして、「治癒可能性という概念」が、「精神分裂病」の治療において「価値を持つ」とは、何を意味するのだろうか。本論文は、ミンコフスキーの思想における、「精神病理学、人間の心理的、また精神的活動が関連する諸現象」の領域と「偉大な諸真理」の領域の交叉、すなわち「身体と精神の平面」と「人間とコスモスの平面」の接触を見定める。

本論文の方法: ミンコフスキーの著作の分析にするにあたって、本論文は以下の二つの視点を採用している。第一に、ミンコフスキーが、人間と世界の「根底の連帯」の構造であるとした「コスモロジー」が、どのような意味でフランス・スピリチュアリズムの思想に依拠しているかを明らかにすることである。

第二に、<同調すると同時に分裂するもの>を、このコスモロジーの基礎に据えたことの意義を問うことである。

こうした視点から主要著作を読み解くことで本論文は、ミンコフスキーが「分裂性」と「同調性」という二つの性質を「生命の二大基礎原理」としたうえで、これら二つのものが対になるひとつのものでもあり、「精神分裂病」の患者の内部でも、また、病理以外のいかなる場合においても並存していること、そしてまた、後者の「同調性」がつねに理論的・実践的な「支え」のようなものとしてひそかに機能していることを明らかにし、その意義を解明する。

本論文の構成および内容：

本論文は、第一部「方法と実践—『生きられる時間』読解」、第二部「精神病理学」、第三部「『精神の哲学』としてのコスモロジー」から成る。

第一部第一章は、『生きられる時間』という主著における「時間」と「空間」についての考察が、ミンコフスキーの「精神分裂病」についての研究と並行して練り上げられていたという仮説の下、まず彼の「時間」と「空間」の概念について検討する。そうして明らかになるのは、ミンコフスキーが分離的性質と結合的性質の両面を不可分な全体として提示していること、また、この二元性を結びつける絶対的な中心として、「生きられる現在」というあまり注目されない論点を見出したことである。さらにこのことと関連して、ミンコフスキーの重要概念である「生きられた接触」という概念について、従来参照されてきたベルクソンではなく、むしろフランスの病理学者ピエール・ジャネの思想との関係を探ることによって、とりわけその記憶論の重要性を明らかにしている。

第二章は、「四つの原理における分裂と同調」である。ここでは、『生きられる時間』の第一章から第四章までに提示される四つの原理を分析することを通して、分裂した諸点が、その中心性を「休息」させながら世界を分有するまでの過程を示している。そしてまた、ミンコフスキーのこれらの原理が、単なる思弁ではなく、ブロイラーの臨床から着想を得た臨床的なものであることを『精神分裂病』の記述から確認することによって、その病理学的な意義を哲学的に明らかにしている。

第二部第一章は、「『精神分裂病』論における自閉概念」である。ミンコフスキーは、分裂性と同調性の錯綜する様態について、「理性」による診断と合わせ、医師の「全人格」によって「洞察」することこそが必要だと考えた。そして、後者を「直観」とも呼び、これこそが「精神分裂病」において、一種の同調性を基礎付けるとしたことを強調する。さらに、ミンコフスキーが、どのような様態を「分裂」と考えたのかについて、ブロイラーが記述した「自閉」概念に注目し、その病理学的な意義を哲学的に明らかにする。

第二章は、「現代の精神医学と接触の精神医学の交叉」である。ここでは、「分裂性」の内奥で働く「同調性」について検討する。「現代の精神医学」と呼ばれる原因と結果の因果律を見定めようとする医学が、人間と世

界の接触を見る医学と交叉する場を、ミンコフスキーの『精神分裂病』と、ミンコフスカの『ロールシャッハ』における分析を通して明確化するのである。

第三部第一章は、「諸経験間の移行の問題」である。ここでは、「精神分裂病」における回復の問題について、フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティによる、ミンコフスキーの「明るい空間と暗い空間」についての分析から裏付けることを目指す。メルロ＝ポンティとミンコフスキーによる「明るい空間と暗い空間」や幻覚の問題と、ミンコフスキーによる「進行麻痺」患者との会話を取り上げ分析することによって、経験の移行や「回復」を可能にする、人間と世界が結ぶ内的紐帯があることを明らかにする。

第二章は「精神の哲学」としてのコスモロジーである。ミンコフスキーが自身の思想の基盤として立脚したのが、世界と人間の「根底の連帯」という考え方であった。ミンコフスキーにとって「世界」とは、あらゆるものが内包する「小宇宙」から構成される。ミンコフスカがロールシャッハ・テストの方法論によって研究したゴッホの描く線は、人間による小宇宙の内包を、ある「領野」に降り立つ人間の視点から捉えるものとして分析される。こうして、分裂した諸個体が、それぞれの内的紐帯としての小宇宙によって、一つのことを共有することを示す。このような分析を通してはじめて、フランスのスピリチュアリズムの思想と治療概念を含んだ精神病理学の統合的なヴィジョンが成立するのである。

こうした「分裂性」と「同調性」の二大原理の思想のなかで、ミンコフスキーは「精神分裂病」の治癒可能性を主張したのだが、その射程について最後に検討が行われる。本論文は、「分裂性」が「同調性」の支えとなっていることを強調することによって、人間学的精神病理学を基礎付けるとともに、精神分裂病の治癒可能性についての主張をも正当化できると結論する。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、精神病理学の古典とされながら、現在は真摯に顧みられることの少ないウジェーヌ・ミンコフスキーの思想を、その哲学的側面と精神病理学的側面の両方を考慮することによって分析、検討し、その現代的な意義を再評価しようとする意欲的な論文である。最終試験では、精神病理学者ピエール・ジャネについての独自の議論に関して、「生きられた接触」が隠喩などの言語表現とどのような関係にあるのか、また形而上学的な連続性の思想と人間学一般がどのような関係にあるのか、「浸透」概念の意義の広がりなどについて、活発な質疑応答がなされた。そのうえで、治療論についての論述がやや分量的に足りなくて説得力に欠けること、「人格的」と「個人的」といった概念が曖昧に理解されていること、そして各章の関係の有機的な結びつきがやや弱いことなどが指摘されたが、このことは本論文の学際的な性格から帰結するものでもあり、その意欲的な論述の学術的意義を貶めるものではない。

### 2 最終試験

平成28年2月3日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。